

粟郷会會報

22号

40. 6. 10

兵庫県粟郷郡
山崎町教育委員会内
粟郷土研究会

松平康映時代の分限帳 (上)

島田清

近世の山崎藩が創設されたのは元和元年（一六一五）で当時の石高は三萬八千石、領所は粟郷郡一円、藩主は池田輝政の第四子、石見守輝澄でした。輝澄は、慶長九年（一六〇四）姫路城内に生れ、母が徳川家康の第二女であつたところから松平を称し、大阪冬の役が終つたあと、忠継が急逝すると、所領の一部、粟郷郡を分け与えられて山崎藩を興したのでした。

この時代は、不気味な武装的平和が解決し、江戸幕府が名実ともに大磐石の上に立つたときで、地方にも新興の氣分が横溢していました。山崎に近世的な城と城下町が設けられたのはこのときで、現在見る山崎町主要部の区画や造成は、この時に基礎がつくられたといつてさしつかえありません。

目次

松平康映時代の分限帳(上)	島田清	1
山崎闇斎の門弟	杉山よしあき	3
白い壁	福井託二	5
いづたえ	栗山宗知	5
四睡庵素練著		
俳諧三音鳥(續)		6
郷土だより		11
春季見学旅行		12
会員名簿(18)		12

これより一六年を経た寛永八年（一六三一）、輝澄は加増をうけて六萬三千石となりました。石高が増せば召抱えられる武士の数も多くなり、城下の規模もそれだけ大きくなるのは当然です。この時代の山崎藩は、前後二百五十年を通じて最高の石高をもつていたわけであり、城下にも活氣がみちみちていたといえます。

ところが寛永一七年（一六四〇）、家中に騒動が起つて藩は取潰しになりました。藩の内外にかなりの動揺があつたのはいうまでもありませんが、あとへ入つてきた松平康映がうまくおさめたため、別段、問題も起らず城下の繁栄

もそのまま続きました。このころが、山崎藩の第一次全盛期と呼ばれる時代です。

二、

松平康映の家は、もと、松井と呼んでいました。すなわち、祖父康親は、松井忠次と称して三河の松平康忠に仕えていましたが、角平の戦に功をたて、松平の姓を賜うとともに三河国幡豆郡東条城の城主となりました。のち、家康が岡崎城主になりますと、今川家の遠州諏訪原城を攻め、偏諱をもらつて康親と改めました。

天正一一年（一五八三）、康親は駿河の沼津城に歿しました。嫡子康重はあとを継いでますます忠勤を励み、家康が関東へ移された天正一八年（一五九〇）、武蔵の私市城二萬石の城主となりました。慶長五年（一六〇〇）、関ヶ原合戦が起つた時、康重は会津の上杉氏に備えて関東にとどまつていましたが、論功行賞の結果、常陸の笠間城三萬石の城主となり、同一三年（一六〇八）、丹波国八上城の前田氏が国除されると、そのあと、五萬石の城主に抜てきされました。康重がこのとき与えられた任務は、山陰道の外様大名と、大阪城の豊臣氏とが連絡するのを遮断することとにありましたので、家康は西国一四カ国の大名二十家に命じて篠山新城をつくらせ、でき上ると康重を八上城より移らせました。

近世の篠山城はこのようにしてつくられ、康重はここに

一一年間在城しました。しかし、大阪夏の役が終り、諸大名の配置替が断行された元和五年（一六一九）、和泉の岸和田城に移り、寛永一七年（一六四〇）、さらに宍粟郡山崎城へ移つてから歿しました。康映は康重の嫡子としてそのあとを継ぎ、国防守に任官した人で、山崎在城十年間にのこした治績については、山崎の徳行家で、かつ、郷土研究家であつた片岡醇徳が、その著書『宍粟郡守令交替記』に次のごとく記しています。

先代は高知の家臣多かりしかども、戦国の余風にや、質素の風有て、武勇自然のたしなみ有りて、文美の風すくなし。当代にも、武道はげしからざるにはあらず且礼文の風あり、衣食・家宝・器物等野ならず。其風儀いつとなく下にうつれり。工・商の職業等も盛んに行なわれし故に、近きもの悦び遠き者来る。農民の租税は薄からず、然れども税欵寛容ありしゆへ、野民苦しまず。農工商所を得たるに似たり。

若い頃から山崎町の自治制に参画し、池田・松井・池田の三松平家に歴任した醇徳のこの評語は、恐らく、その実態を的確に捉えたものであるかと思ひます。したがつて、簡単な言葉ながらも充分に玩味し、その生れ出た根底を推考する必要があらうと思ひます。

ところが、現在の山崎には、この時代の史料が殆んど残っていません。大名の所替は、現在のわれわれが想像する以上に大きな変化と影響を与えるもので、事実の埋没や史料の湮滅もなかなか馬鹿にならないものがあります。したがって、その欠陥を補うためには、広く関係方面を探索し、史料の収集につとめねばならないわけで、地方史研究者の労苦もそこに大きくかかっています。去る昭和十年、島根県の浜田史談会から刊行された「浜田町史」は、この時代に出された地方史の出版物としてはなかなか堂々とし、諸方から労作を買われている書物ですが、この中に、慶安二年（一六四九）、山崎から浜田へ移った康映の分限帳が載っています。しかも、この分限帳は、康映が浜田へ引越した当時のもので、言葉をかえていえば山崎藩最末期のものといつてもさしつかえないわけです。山崎藩初期の史料として大切であることは、いまさら言うまでもないことです。私は、山崎のかたがこの資料を知っていただけるかどうか、お尋ねしたことはありませんが、これまで、あまり話題にのぼらなかつたことから察すると、知られないかたが大部分なのではないかと思えます。それで、敢て、その全文を掲出することにしました。

（以下次号）

山崎闇齋の門弟

杉山よしあき

山崎闇齋先生（一六一八〜一六八二）は、神道、儒道、史学、の偉人でありますことは、すでに皆さんは御存知の通りであります。闇齋先生の学系や、家統、また著者などについては、「会報」の13・14号に詳しく出ていますので、ごらんになればよろしいと存じます。

さて、今回は闇齋先生の門弟の中で、水戸義公の「大日本史」の編修に参与した人々を簡単に御紹介したいと思えます。

錫飼鍊齋は、闇齋の直弟子で、京都に生れ、二十才の時闇齋の門に入りました。延宝六年の三十一才



の時、水戸に招かれて三百石を賜わつて、「彰考館」に入つて「大日本史」の編修に従事し、元禄五年にはその総裁に任せられました。けれども惜しいことには翌年四月、四十六才で逝去しました。

栗山潜鋒は、桑名松雲の門人で、闇齋先生の孫弟子に当ります。元禄五年に、水戸に聘せられて、「大日本史」の編修に与り、祿高三百石を賜わつて、後に、元禄十年、二十七才の時に抜擢されて「彰考館」の総裁となりました。

宝永三年、三十六才の若さで病没しました。「保建大記」の著者であります。

三宅観瀾は、浅見訥齋の門人で、闇齋先生の孫弟子に当ります。元禄十年に水戸に仕えて「彰考館」に入り、宝永七年にその総裁となりました。著書に「中興鑑言」があります。



風光、緑の季節、快適なドライブ
あなたの自家用車の味

タクシーは山交へ

安全

TEL. 166 930

親切

○ 鶴飼称齋は、鶴飼鍊齋の弟で、天和三年に水戸に仕えて「彰考館」に入り、館員となつて「大日本史」の編修に与り、享保五年に六十九才で没しました。

○ 打越撲齋は、名は直正と言ひ、字は子中で水戸義公の命によつて、闇齋先生の孫弟子の三宅観瀾の門弟となりました。そして「大日本史」の編修に与り、享保十二年にその総裁となりました。元文五年に五十五才の時死亡しました

○ なお、余談ながら「日本外史」について述べますと、頼山陽の「日本外史」は、闇齋先生の思想と深い関係がありまして、闇齋先生の学系の一つと考えられます。

○ 頼山陽の父春水は塩谷道哲に学びました。その道哲は久米訂齋に学びました。この訂齋は三宅尚齋の高弟であります。尚齋は申すまでもなく闇齋先生の高弟であります。闇齋先生の精神は、ついに頼山陽に感化をあたえていると思惟されます。

○ 右に述べました山崎闇齋先生の学系を略図で示しますと次のようになります。

闇齋

鵜飼鍊齋	鵜飼称齋
桑名松雲	栗山潜齋
浅見桐齋	三宅観瀾
三宅尚齋	久米訂齋
	塩谷道哲
	頼春水
	頼山陽

四十・五・六

白い壁

福井託二

常々思うことであるが、山崎にも城と名のつく様な建物が一つ位有つても好いだらうと。城とはいかなくとも、それらしい物がほしいと思つてゐる。別に今流行のお城再建ブームに煽てられた訳でもないが、有つても良いと思つては僕一人ではあるまい。何しろ黒田六万石の城廓の基礎から続いた山崎である。一本松篠の丸に忽然とスマートな五層天主閣がそびえている夢見に棟喜びをしたことは二、三度ではない。こんな矢先に僕の家檀那寺である須賀沢の願寿寺がフト脳裏に浮んだ。遠く西南の川西から眺めると小さな城廓そっくりである。近づいて真正面から仰げば小大名格の大手門である。試に姫路からバスにのつて安志峠を西に下つて見給え、前方右側にさつき見てきたばかりの白鷺城の隅櫓をつくりで、青若葉の中に浮んだ願寿寺の置

物櫓を見付けるであろう。元文の昔、大修築以来の綺麗な姿そのままである。四、五年前又白壁のぬりかえで、一段と美しくなつてゐる。寺の正面石段を登つて四柱大門の両端からのびる左右の白壁は先代院主御自慢の矢鱈に見かけない袋塀である。高く積んだ城組石垣に白い建物がかつて、それに調和する様、前庭の大銀杏が今出盛りの若葉の枝を覆いかぶせてゐる。大門右側の碑石のたたづまい鐘楼の見えかくれ何んとも云えない眺めである。云うなれば須賀沢城大手願寿門の威容でもある。諸君暇をみつけて一度この須賀沢城をヒソカニ見物に行き給え。こんなに近くこんな立派な白壁があつたのかと驚かれるであろう。白鷺の城が天下の名城の名をほしいままにしているので、近所まわりの白壁達のみづから名のるのも、おこがましいと御遠慮申上つてゐるのかも知れない。竜野になく林田、置塩、松山にもなく、安志、与井、安積更になく、長水の名城も山のみ高うしてここ山崎も御多分に洩れず、只城櫓らしきもの須賀沢に有つて僕は大いに気を良くしてゐる。願寿寺の物置櫓、念々白光を放ちて以つて瞑すべし。

いいつたえ

神谷 栗山宗知

耳仏様のこと

新発売


世紀の必需品

活性 **クロレラ** プレット

人体の根本的な体質改善を目的とした食生活の必需品

トトバイ産業株式会社

電話 山崎九二六番



矢原のお薬師様は元矢原村薬師谷にあり、耳の仏様であつた。所が三津の街道を乃井野の士が馬に乗つて通ると、山陰でよく馬よりまくれる。不思議に思つてしらべると、丁度矢原のその見当にお薬師様があつて、そのあたりだといふので、それ以後お薬師様は下へおろしたといふ。現在は山下平二郎さん宅の裏、田口実さんの 畠にある。御本体は木彫で、耳の仏様といつて信心すると耳が通じるとて、穴あき石に葉を通して供えている。

● 北山裁判のこと

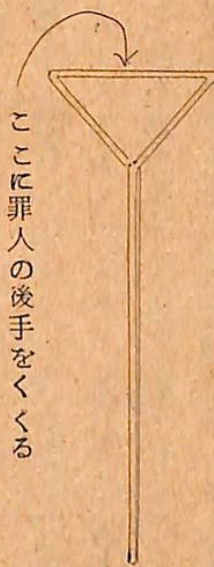
昔、神谷北山を神谷の物じや、いや矢原の物じやと取り合ひして裁判になつた。奉行所へ呼ばれて

- 「神谷の者は何という」
- 「へい北山といひます」
- 「矢原の者は何という」
- 「へい北山といひます」
- 「阿呆め、神谷の者は北山でよいが、矢原の者が北山

とは何じや。神谷の物とわかつた」として神谷領になつたといふ。成程山は神谷の北にあつて矢原では南に当る。

● べら棒の話

昔、罪人を連れてゆく時、後手にくくつてそこに棒をあつて押して行つた。それがべら棒じやそうな。



● 五輪さんのこと

矢原谷口猪之市さんの畑に五輪さんあり(三、四個)。それは昔、奈良の鹿を殺した者がここ迄逃げて来て、石子詰になつた所といふ。現在岸田の人がお堂を建ててまつている。

● 子安地藏さん

矢原に小さい地藏さんあり(場所をきくのをわすれた)子安の地藏さんといつて、抱いてねると子供が授かるといふ、時々お留守の事があるそうな。

四睡庵素練著

俳諧三音鳥 (続)

短歌行

と師納涼庵南架

持もつて鐘の供養も桜かな

大会の声の雉子に駒鳥

春の野の殿に御側衆つかなくに

さつと通つた雨の男氣

出はなれの松にいるさの月の影

薄着案ずる養父入の伯母

精霊も好てあつたに芋魁あへ

呑と利女の見ゆる慶庵

風景も二階座敷は格別に

霞はなれて千舟百舟

隠居して出たいと思ふ内か華

使も節句めいた桃色

耳垢の黒さをなぶるぼんと町

何をいふても長湿雨の見世

あのやりに夜昼なしの郭公

近い入部に只歩行殿

正直の光る天窓に金やとる

ひとつとほして四方八徳

更るともしらすしらすら月の雪

素練 菰月 惠我 民止 古人里 志閣 流水 文川 白橋 魚淵 金雨 龜有 王倉 好之 柳糸 歌柳 杏雨 葉翠

寿水の秋の哀れ琵琶の音

麦飯の空かゝる時太鼓腹

そこら箒の舞て掃除日

年々に言出す花の散おしみ

夙に起てはうくひすの経

手向の花

はや二日唯戻りしを初桜

散時に名の流てやさくら川

そよ吹や木の下陰は花の雪

おとろひを見せぬ手際や落椿

幕の紋算て歩行花見哉

墨染のまた捨かねてさくら哉

織殿の庭にはいてや糸桜

菅笠のうけ心よし花の雪

うき風はしらぬ顔や桜草

春風の上めり加減や花の艶

盛替は山の伊達なり遅桜

海棠や見ている人もとろとろ目

風の手に遊て梅のかほり哉

簾から見ればまことや華の山

玉籠を巻あけにけり花の雪

春の戸のひらきはしめや梅の花

甘裳 梅里 乾中 阿丘 仙斧 蝶翠 杏雨 甘裳 乾中 惠我 梅里 仙斧 菰月 魚淵 金雨 白橋 好之 柳糸 歌柳 王倉



夏は榮養隨一。

氷 三浦の肉に限りませす

暮るるともしらぬ添乳や姥桜

行春のしたり尾見せてふしの花

山明や障子にうつる金細工

野遊の果は見えけり山さくら

野に山にかけるや人も華に鳥

人の気も空へひらくや峯の花

松陰は松をあるしの花見かな

雨風をいとふてもなし木蓮花

散ることの瘦我慢なし桃の花

見る人の気もみな若し花盛り

ちつて又魚の遊びや岸の花

萬有精靈応笑我

紅梅や反魂香は炷すとも

播陽四睡精舎にして古庵主か十七吊忌を営給へ

る誠に有ことの難しとは此法会なるへし

その恩の荷ひ尽せず華の雨

流水

亀有

鳥声

文川

志閣

民止

蓮子

雪篁

綾花

阿仙

素竹

素朝

綾羽

綾羽

合す手につもるや花の雪をけふ、納涼庵娘ちか女

明暮に師恩を忘却すへきにはあらねとわけて此

年此月は慈明忌に当り給へるより其碑前に蹲ま

りて空しき影に對するのみ

鳥も来て噫と啼日や塚の花

かささき庵花古

納涼庵主人は彌生 未の二日かそふれははやくも

十七年の星うつり社中にけふの雅薙を得て靈魂

を慰る思へは雪の衣裳も消へて跡なく花に向と

も花ものいはす唯其俤そなつかし

唇のうこくやうなるさくら哉

四睡庵素練

文通

枯て行草の浪間や落し水

東武六幽

曙の色いつまてそはつ桜

陸馬

野も山も氷の中や冬の月

天樹

風誘ふ老の出そめやねはんの日

以游

昼からの月も忘れそ華明り

川耳

片鳥居磯に残してかすみかな

松雨

木からしの来ても間ぬけや枯柳

逸芝

これ聞てはせをもひらけ郭公

綾人

七度の空にも瘦や春の雪

白員

入相を畑にこほすや芥子の花

松壽

春雨の骨見付たるやなきかな

庵言

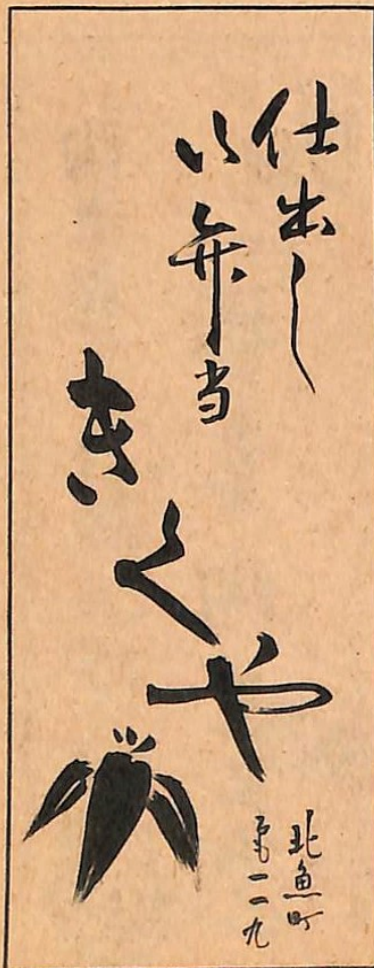
炉ひらきや雪にもならずあられ灰
 こたつにも臥猪の床や薬喰
 梅咲くや鳥の水吸ふ日の旋み
 遠く行帆の影遅し夕霞
 曇るほと山は桜の月夜かな
 やすやすと鳴戸越へける休鳥
 折とれは夕日手にもつ紅葉哉
 竹植る日や瓦屋も風かほる
 馬追の壁においつく嵐かな
 ふり袖に化る老木やふしの花
 大根の青葉に太る時雨かな
 水底に春のうこきや藤の花
 蘭の香やまた眼に見へぬ風の伝
 白雨や有にもあらず根なし竹
 卯花の夜明うけ取紙帳かな
 達磨忌や豆腐も壁の悟めき
 人先へ起出にけり雛の主
 繫かれて牛も動かぬ柳かな
 転寝のつい牛になる日永哉
 足洗ふ流に白し大根引
 姿鏡に瘦てうれしき裕かな
 雉子啼や一太刀うけて岨伝ひ
 白梅やまた冬枯の眼に寒し

東武三綾花

夜白 花溪 里尺 文笠 文鷺 双鳥 帰童 青途 女李塘 蟻水 風斜 川子 柳童 ちか女 可野女 綾羽 綾花 南畝 長龍 素柏 素幽 魯舟 浪府

梨咲やまた朝風の齒にしみる
 白蓮や汗の冷つく夕間くれ
 秋に散るものとは見えす雲の峯
 また掃ぬ夜明の芸や蚊の行衛
 涼風も這て下りるや岩清水
 春雨もこれから晴て雉子の声
 紅梅や鳥もほろ酔ふ真夜中
 葦や隣はとふに起て居る
 行秋やへはり付たる薦かづら
 枝折戸もしほらしふりや霜の朝
 月も花も開へ踏込師走哉
 夕立や昼寝も竹も起かへり
 上戸にも下戸にも向て柳かな
 鐘に聞く寺の深さや八重霞
 降となく風の煙りや阜月雨
 たそかれに越る峠や閑子鳥

井蛙 阿仙 尽水 舒堂 素梵 竹瓦 暮山 千車 不来 徐来 柳毵 蛙吹 素朝 金奈川 加州金城 岩中 鱸舟



いろいろに露を配るや草の上
たましいに声あるも憂し閑子鳥
乗物に御供は黒し下馬の雪
下蒔や田のあかりも喩かゝり
秋の夜のたたさへあるに砧かな

物いはぬ中もうつくし花に蝶
堅という人怨なりさくら狩
影法師にまで匂ひあり窓の梅

留主の間に喰ふとりたる神馬哉
清水の舞台を出る乙鳥かな
うくひすの糞おとしけり水の上
臘夜の柳もしはしまとろみぬ
詣はぬ氣に計けり枇杷の花
籠門の内外もなし梅の花
詠せし間にちるもあり芥子の花
雉子啼て女のいそく山路哉
かけるふや蛙飛のく石の上
二つ三つ日裏は寒し梅の花
世の中や鹿追ふ人に箭人に
にきやかにふたつ啼ても閑子鳥
春雨の音みふり出す柳かな

相州加半
浪小田原

其華隣
因羽柳

尾
蓮阿房

一筆坊
一斎坊

武鴻巢也
遠柳也

因周若櫻連

度始百律

梅朝之

志功山

乃東野阿
其柳

陶滋器 建材

塚本陶器店

山崎町本町
電話五六〇



落栗に節句して行山路哉

鹿鳴や無言禪師の笑かほ

暑日にしらぬ峠の清水哉

葉桜や峯に定る雲の色

朝寝してつり合のよき日永哉

朝風に柳の春を見届けぬ

月花にかゝるせわなし青あらし

草に寝て夜を明さはや虫の昼

草むらに玉をちらすや朝の露

橋からも雫の落る菖蒲かな

見るうちに手をそへにけり芥子の花

浜風のととけて窓の千鳥かな

紫陽花や暑もうすき染かけん

一しきり梅の由断や寒かほり

巳が背の着丈に余る柳かな

すなおさの風にめたつや糸柳

姫路寒馬

寒桐

福本龍宮

平野栗郷

李滴

姫路廉甫

新宮秋扇

梅興

露玉

女松風

なか女

やそ女

浮山

山岩花雪

舟渡 亀峰

きし田とき女

永き日や糸のもつる、針仕事
にかみある顔にも咲やふきの花

頓て染る山を晒すやけふの月

木陰から光へ消けり月の霜

白滝に紅のうつりや姫つゝし

呼かける声にふりむく蛙かな

朝々 はまた冷つくや梨の花

錦着た木々も素肌や冬木立

鉢うへの世話に笑顔や冬の梅

身ふるひに腰をのしけり雪の竹

五月雨に洗出しけり庭の石

うき草のすきに臥けり雲の峯

冬枯の木々にも花や今朝の雪

闇の夜を見よとや花の飛ほたる

引しほる幕もちり行きくら哉

山城もひくふ見へけり若葉時

日々に山の瘦行しぐれかな

歛音を聞て戸をさす田螺哉

夢は何所へ寝耳にふつと郭公

暖を磨出す艶や菜種畑

思ふほと積りて憎し春の雪

氷喰ふ日も頓てなり雪の下
冷さにふまぬてはなし雪の庭

四睡庵

なか女
魚社中
淵

金雨

白橋

亀有

鳥声

岸々

民止

古人里

志閣

文川

流水

好之

歌柳

露公

布川

竹布

林鳥

柳糸

王倉

仙斧

孤月
惠我

簑笠の着心かろし玉あられ

吞好の畏にかかるや菜喰

入相の鐘に涌たつ江葉かな

綿入のまたおもくるゝ小春哉

野鶉や聞人は駕の内なから

川の瀬の流るゝやうに乙鳥哉

骨高に石あらはるゝ焼野哉

とりかゝる秋や一ふし山かつら

霜に寝ぬ葉も覚悟あり石落の花

★★郷土だより★★

★山崎大橋 安栗橋の南方約五〇〇メートル下流の船元

須賀沢間に架設、国道二十九号線の新道を結ぶ延長一二

〇米、幅員七米の永久橋。真直ぐに安志峠に登つてゆく

この道路は五月より開通し、山崎と姫路の最短距離で、

一部未舗装の部分も本年度中には完成予定だから自家用
車なら三十分位で行ける。

甘草
雪簀
杏雨
蝶翠
乾中
梅里
蓮子
阿丘
豊素
草園
練

優良メカ

各種自転車

オートバイ

軽自動車

販売修理

山崎町本町

小型自動車整備工場
有限会社 坂元商会

電話
三六六



☆山崎中学校体育館 本多記念館あとに建設を急いでいた

体育館は四月二十日落成式を終り、鉄筋コンクリート造の建坪二二六坪、総工費約千六百万円の偉容を誇っている

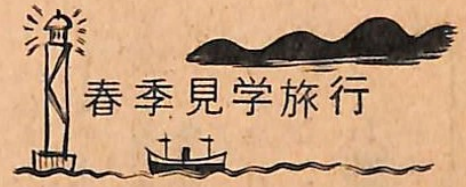
☆八幡神社修理と楠風閣建築 山崎町八幡神社は、戦後初めて痛みの目立つた隨身門の修理、総馬殿の改築を行つた。同時に結婚式場として楠風閣（建坪七十坪）を新築。五月五日竣工式挙行、すでに三月下旬から五月末までに約三十組の挙式があつた。尚淨財約一千万円は、町出身関係各方面と町内居住者有志各位の協力を得た。

☆本多家宝物展覧 大阪市の大坂城天守閣で開催された夏の陣三百五十年記念展覧会に市側よりの要請により、本多忠勝公画像、忠朝公夏の陣使用の血染の肌着、馬標二を出品。会期は五月一日より同末日迄であつた

☆さつき展 山崎名物のさつき展が六月六月七日二日間下村記念館で開催。年々歳々愛好者が増加して当町に欠かすことの出来ない年中行事となつた。
(横井)

会 員 名 簿 (18)

紺屋町	楠	俊	三	城	下	藤	野	広	一
上寺	福	井	と	神	野	永	井	謙	治
山	秋	元	熊	〃	〃	永	井	い	ま
本鹿沢	坂	本	勇	〃	〃	東	井	き	ぬ
城	小	寺	益	本	町	鳥	羽	佐	太
下	千	本	廉	治					



春季見学旅行

待望の淡路島見学予定のところ、フェリーボート長期ストの余波をうけて、五月十六日当日となつて計画変更。神戸市方面見学旅行実施となつたことは、誠に遺憾であります。が御了承願うより外、幹事一同も手のほどこしよすがありませんでした。誌上をかりて御詫び申し上げます。

当日見学順路は、神戸港メリケン波止場より「あすなる丸」に乗船、海よりの神戸、国際港神戸を充分に鑑賞、八万トン級の新造船日水の捕鯨母船など外国船も近々と見物し、上陸して「相樂園」(元小寺謙吉邸)を訪いつつしの満開、大蘇鉄林、明治初年ハツサム氏建設の洋館を見学、六甲山頂に登る。眺望を恣にし、昼食後摩耶山へ下る。ここで記念撮影。湊川タワー近くで休憩「須磨離宮跡公園」に至り、戦災で焼失した離宮のあとの広場に感慨を深うした。園内整備中で、石燈籠、大樹、巨岩に昔を偲んだ。

(安井)



さわやかな香りにモジンを感覚を加えた
新しいゆかたをお召し下さい

とくたあ

暑さに負けず夏を楽しくする
眼地をどうぞ!!

本町・てんあ304